

ルイーダ・パレイゾンの「《形成性》の理論」に関する一考察

—テーゼ「純粋かつ特殊で意図的な《形成性》としての芸術(L'arte come formatività pura, specifica e intenzionale)」の本質を明らかにする—

片桐亜古（北海道大学／札幌大谷大学）

本発表の主旨は、現代イタリアの美学・哲学者ルイーダ・パレイゾン（1918-1991）が『美学-形成性の理論』（1954）において提示した「《形成性》の理論」に関する考察をおこなうことである。より具体的には、発表の中でパレイゾンが同書において提示した「純粋かつ特殊で意図的な《形成性》としての芸術（L' arte come formatività pura, specifica e intenzionale）（1）」というテーゼの本質を明らかにすることを意図している。

《形成性》とは、あらかじめ定められた様態に従って行為するのではなく、行為の様態を造り出しながら行為するという、人間行為のすべてに備わっている性質のひとつをいう。

パレイゾンは解釈を方法論として用いながら人間の行為のメカニズムを説明することにより、《形成性》の性質を浮き彫りにしようと試みた。説明を試みるにあたって彼が範例として用いたのは、芸術的行為であった。というのも、パレイゾンによれば《形成性》の特質が人間の行為の中で特に顕著にあらわれているのが芸術的行為の様態においてであるからである。芸術的行為つまり芸術作品の形成行為および受容行為について、その鍵を握るこの《形成性》の性質から解明したいと考えたのが、本発表において「《形成性》の理論」をとり上げたきっかけである。

本発表ではまず、パレイゾンが解釈理論を方法論としてとりあげることにした前提条件、すなわち何故パレイゾンが解釈理論に興味を抱き、またどのような理論的裏付けをもって、解釈が《形成性》という性質をもつ行為のメカニズム理解の方法論たりうるのかの分析を試みる。

次に、《形成性》という性質の明確化をはかった上で、何故パレイゾンが人間の行為のあらゆる様態にみられる性質の中から、特にこの《形成性》を選んだのかを考察する。

続けて、芸術的行為と芸術以外の行為における《形成性》という性質の現れ方の違いを検討することによって、芸術的行為において特に顕著に現れる《形成性》の特徴を確認する。そして、確認された《形成性》の特徴を、上記のテーゼにおける「純粋な」「特殊な」「意図的な」という表現と照らし合わせ、それらの表現にパレイゾンが込めた意味合いを明確かつ具体的に把握することでその概念化をはかってみたい。

以上の手順で考察を行うことにより、上記テーゼの本質を明らかにしたいと思う。

(1) Pareyson, Luigi, *Estetica. Teoria della formatività*, Milano, Bompiani, [1954] 1988, p. 22